第五講『古今著聞集』／『明恵上人伝記』　同志社大学

一　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

大殿・小殿とて聞こえある強盗の棟梁ありけり。大殿は、後鳥羽院の御時からめられけり。小殿、高倉の判官章久がもとへ行きていひけるは、「日来年来からめかねて、あなぐり求められ候ふ小殿と申す強盗こそおもふやうありて参りて候へ。はやく受け取らせ給へ」といふ。章久まことしからずおぼえながら、ａおろおろ子細を問へば、小殿いはく、「ア御不審候ふこと、もつともそのいはれ候へども、まづおぼしめし候へ。ただのしら人が強盗とみづから名乗りて、命をまかせまゐらせてなにのせんか候ふべき」といへば、①げにもことわりにて、くはしく問答するに、小殿がいふやう、「年来西国のかたにて海賊をし、東国にては山立（やまだち）をし、京都にては強盗をし、辺土にてはひきはぎをしてすぎきつるなり。かかる重罪の身をうけ候ひぬれば、この世にてもやすき心候はず。夜もやすくもねず、ひるも心うちくつろぐことなし。世のおそろしく、人のつつましきこと、かなしき苦（く）患（げん）にて候ふなり。Ａさても一期ことなくてあるべき身にても候はず。つひにはさだめてからめいだされて恥をさらし、かなしき目をこそ見候はんずれば、人手にかからんよりは、心と参りて、かつは年来の罪をもむくはんがために、頸をのべて参りて候ふ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

なん」といへば、章久あはれにおぼえて、[b]左右なくも受け取るべけれども、その儀なくして、答へけるは、「いまは使庁の庁務停止したるなり。かつは聞きもおよぶらん。年来つくりおける[B]牢どもみなうちやぶりて仏所につくりなどして、一向庁務をとどめて、後世のことをいとなむなり。徳大寺殿に伺候の源の判官康仲こそ当時ことに高名をたてんとする人なれ。かしこに行きてこの子細をいはば、さだめて悦びおもはんずらん」といへば、「さ候はば、御文をたまはり候ひて、源の判官殿へ参り候はん」といへば、「それはやすきことなり」とて、文書きとらせければ、すなはち持ちて康仲がもとへゆきて、章久がもとにていひつるがごとくにいひて、「もし万が一、命をいけて、めしもつかはれ候はば、別の奉公には、余党その数おほく候ふを、一々にからめさせまゐらせん」といへば、康仲興あることに思ひて、受け取りてつかひけり。

　給物三十石をとらせて朝夕めしつかふに、ことおきてかひがひしく大切のことどもおほかりければ、大納言家にこのやうを内々申し入れたりけるに、「いと興あることにこそ。さやうの者は、中々さるかたもあるなり。我に得させよ。めしつかはん」と仰せられければ、参らせてけり。侍ひゆるされてめしつかひけり。康仲が恩のうへに、五十石の給物をたまはせたりければ、小殿よろこびて、「今はかくて一期身やすくてやみなんずれば、おもふこと候はず。伺候のあひだには、いかにも御所中ならび

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に御近辺には狼藉のことあらすまじく候」とて、一向に御とのゐして奉公をいたしければ、誠にかひがひしくそのあたりには夜の恐れなかりけり。

（『古今著聞集』）

注
山立　山賊。
使庁　検非違使庁。
徳大寺殿・大納言家　いずれも藤原実基。

問一　傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

ａ　おろおろ
1　じっくりと　2　あたふたと　3　おびえて
4　おおざっぱに　5　ひそかに

ｂ　左右なく
1　決着をつけず　2　躊躇せず　3　区別なく
4　根拠なく　5　本意でなく

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部A・Bの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

A　さても一期ことなくてあるべき身にても候はず

1　それにしても、盗みを重ねた罪深い私が生涯このまま平穏でいられる境遇でもありません
2　それにしても、盗みを重ねた罪深い私が善行を積まずに生きられる身分でもありません
3　それにしても、私を捕らえられなかったあなたが世間に顔向けできる立場でもありません
4　そうはいっても、盗みを重ねた罪深い私が死後無事に極楽へ行ける運命でもありません
5　そうはいっても、私を捕らえられなかったあなたがこのままの身分でいられるわけもありません

B　牢どもみなうちやぶりて仏所につくりなどして、一向庁務をとどめて、後世のことをいとなむなり

1　牢獄はすべて壊して、仏堂に作り直すなどし、検非違使としての仕事もいったん中断して、世間の今後の安寧を祈っているのだ
2　牢獄は強盗がすべて壊したので、仏堂のしつらえなどをし、検非違使としての仕事もまったくしないで、殺された人々の極楽往生を祈っているのだ
3　牢獄は強盗がすべて壊したので、仏堂を作るなどし、検非違使としての仕事もすっかり終わらせて、余生を過ごしているのだ
4　牢獄はすべて壊して、仏堂に作り直すなどし、検非違使としての仕事もすっかりやめて、来世の安楽を祈っているのだ
5　牢獄はすべて壊れたので、仏堂に作り直すなどし、検非違使としての仕事もまったくしないで、日々修行しているのだ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部①「げにもことわりにて」の文法的説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

1　副詞「げに」＋係助詞「も」＋形容動詞「ことわりなり」の連用形＋完了の助動詞「つ」の連用形
2　副詞「げに」＋係助詞「も」＋名詞「ことわり」＋完了の助動詞「ぬ」の連用形＋接続助詞「て」
3　副詞「げに」＋係助詞「も」＋形容動詞「ことわりなり」の連用形＋接続助詞「て」
4　名詞「げ」＋格助詞「に」＋係助詞「も」＋形容動詞「ことわりなり」の連用形＋接続助詞「て」
5　名詞「げ」＋格助詞「に」＋係助詞「も」＋名詞「ことわり」＋格助詞「にて」

問四　傍線部ア「御不審候ふこと、もつとものいはれ候へども、まづおぼしめし候へ」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

1　小殿が何をしにきたのか戸惑う章久に対して、小殿は大殿の代わりに自分をつかまえて欲しいと訴えている。
2　小殿が改心したのかを疑う章久に対して、小殿は悪行を悔いて仲間をつれてくるので信じて下さいと訴えている。
3　小殿を強盗と疑う章久に対して、小殿は清廉潔白ですと嘘をついて疑いを解こうとしている。
4　小殿が大殿を脱獄させるつもりかと疑う章久に対して、小殿はそのつもりはありませんと言って疑いを解こうとしている。
5　小殿の正体を疑う章久に対して、小殿はいつわって自首しても何の得もありませんと言って疑いを解こうとしている。

問五　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

1　小殿は東西や中央・地方をまたにかけて悪行を重ねていた。
2　康仲は徳の高い人として有名だった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

3　章久は、康仲にあてて小殿の罪を許すよう嘆願状を書いた。
4　小殿は章久に、もし生かしてくれれば手柄をたてさせようと約束した。
5　大納言家は康仲の給物三十石にさらに二十石を加えて、小殿に五十石を与えた。
6　大納言家に仕えることになった小殿はよろこんだ。

問六　大納言家は小殿をどのように評価したのか、説明せよ（句読点とも三十字以内）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二 次の文章は、明恵上人の伝記の一部であり、現在の京都市にある高雄山神護寺で九歳で出家した後のことを記している。
これを読んで、後の設問に答えよ。

十二歳の時、思ふやう、真正の知識を求めて、正路（しやうろ）を聞かずんば、徒らに心の隙（ひま）のみ費して、得道の益あるべからず。大なる損なるべし。いはんやまた[A]<u>生死速やかなり。後を期（ご）すべきにあらず。</u>急ぎ正（しやう）知識を求めて、なほ山深き幽閑に閉ぢ籠りて修行せんと思ひて、[a]<u>すでに</u>高雄山を出でんと思ひぬ。よりて薬師堂に詣でて暇（いとま）を申し、また鎮守八幡大菩薩にも暇を申して、暁、罷り出でんと寝たる夜の夢に、すでに高雄を出でて、三日坂（みかさか）まで下りたれば、路に大蛇、頭を捧げて横たはり向かふ。また、八幡大菩薩の御使とて、大きなる蜂の四、五寸ばかりなる、飛び来りて言はく、「なんぢ、この山を去るべからず。もし[b]<u>おして</u>去らば、前（さき）に難に遇ふべし。<u>未だその時節到来せざるが故に、道行（だうぎやう）また成ずべからず</u>」と言ふと思ひて、夢覚めぬ。さては子細こそあらめと思ひしかば、このたびは思ひ止まりぬ。

十三歳の時、心に思はく、今ははや十三になりぬ。すでに年老いたり。死なんこと近づきぬらん。老少不定の習ひに、今まで生きたるこそ不思議なれ。古人も学道は火を鑽（き）るがごとくなれとこそ言ふに、悠々として過ぐべきにあらずと、自ら鞭を打ちて、昼夜不退に道行を励ます。ある時は後ろの山の、木の空（うつほ）に木の葉深く積もれる上に常に行きて座し、ある時は見解（けんげ）おこる

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

やう、かかる五蘊の身のあればこそ、若干の煩ひ苦しみもあれ。B帰寂したらんにはしかずと思ひて、いかなる狗狼・野干にも食はれんと思ひ、三昧原へ行きて臥したるに、夜更けて犬ども多く来りて、傍なる死人なんどを食ふ音してからめけども、我をばよくよく嗅ぎて見て、食ひもせずして、犬ども帰りぬ。恐ろしさは限りなし。このやうを見るに、さてはいかに身を捨てんと思ふとも、定業ならずは死すまじきことにてありけりと知りて、その後は思ひ止まりぬ。「おとなしくなりて後、このことを思ふに、その時の見解にて死にたらましかば、あさましきことにてありなまし。はかなかりけることかな」とて、自ら笑ひたまひけり。

（『明恵上人伝記』）

注

真正の知識・正知識　ものごとを正しく分別する方法。
正路　人として守るべき道理。
得道の益　仏教の修得に役立つこと。
薬師堂・八幡大菩薩　神護寺は、本尊の薬師如来を薬師堂に安置し、境内に守護神として八幡大菩薩を祀っていた。
火を鑽る　棒や石を擦り合わせて火をおこすこと。敏捷に作業を進める必要がある。
見解　洞察。
五蘊　人間を形成しているという、肉体・感覚など五つの要素。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

狗狼・野干　犬、狼、狐など。
三昧原　墓地。
からめけども　からからと鳴り響くが。
定業　前世の善・悪の行いの結果として現世の楽・苦が定まっていること。

問一　傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

ａ　すでに
1　すぐにも　2　すべて　3　とっくに
4　まぎれもなく　5　すんでのところで

ｂ　おして
1　静かに　2　気ままに　3　一緒に
4　即座に　5　無理に

問二　傍線部Ａ・Ｂの解釈として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選べ。

Ａ　生死速やかなり。後を期すべきにあらず。
1　死はすぐにやってくる。しかも、死んだ後の世で何かができるわけではない。
2　死はすぐにやってくる。だから、万事すべきことを後まわしにしてはならない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

3　生まれてから死ぬまでの年月は、一瞬である。しかし、すべきことを後代の人に託してはならない。
4　生まれてから死ぬまでの年月は、止まらずに過ぎてゆく。そして、後に繰り返されることはない。
5　生きるか死ぬかは、早いうちに決めなければならない。すなわち、後で考えることができるものではない。

B　帰寂したらんにはしかず

1　命を捨てたであろうと推測して、それには間違いがない
2　命を捨てようと決心して、それに迷いがない
3　命を捨てようと決心して、それが周囲に知られることはない
4　命を捨てるならば、それに優ることはない
5　命を捨てるならば、それほど愚かなことはない

問三　二重傍線部「未だその時節到来せざるが故に、道行また成ずべからず」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選べ。

1　薬師如来の使が三日坂に到着するまでには、まだ時間がかかる。八幡大菩薩と薬師如来と両者の見送りを受けないのでは、仏道修行への出発もしてはならない、と注意している。
2　蜂が冬ごもりをする季節には、まだなっていない。道をさえぎるものがいなくなる冬まで出発を待てないのでは、仏道修行も完成させることができない、と教えている。
3　高雄山での修行を終えて次の段階に進む時機には、まだ至っていない。今、高雄山を出てしまったのでは、仏道修行を完成させることができない、と戒めている。
4　仏道修行の完成に必要な困難に出遭うには、まだ出発を待つほうがよい。困難を乗り越える経験を重ねないのでは、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

仏道修行を完成させることができない、と諭している。
5　仏道修行をさらに進める夢を見るには、まだ冥想の時間が足りない。冥想しつつ仏道修行の完成を夢見られないようでは、現実の仏道修行も始めてはならない、と警告している。

問四　本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選べ。

1　上人は、十二歳で高雄山を出ようとしたとき、薬師如来や八幡大菩薩に挨拶をしているうちに、朝を迎えてしまった。
2　上人は、三日坂まで、大蛇に案内されて下ってきた。
3　上人は、八幡大菩薩の意向を、夢の中で、蜂から説明された。
4　上人は、十三歳のとき、老いは感じたが、かえって不死の境地に近づいたと思った。
5　上人は、昼夜分かたずの修行を、自らを奮い立たせながら続けた。
6　上人は、仏道修行は、年老いたら、閑静なところで進めるのがよいと考えている。

問五　傍線部について、上人はどのような行為を「はかなかりけることかな」と言ったのか、説明せよ（句読点とも三十字以内）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　復習問題

① 次の傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、後の中からそれぞれ一つ選べ。

「～笠をさして送るは、あはれにａありがたき者の心なり」と…
～智（さとり）あるｂやむごとなき僧、…

ａ　ありがたき
イ　正直な　　ロ　奇特な　　ハ　有能な　　ニ　親切な　　ホ　風流な

ｂ　やむごとなき
イ　ひときわ尊い　　ロ　たいそう忙しい　　ハ　とりわけ有名な
ニ　はなはだ裕福な　　ホ　きわめて美しい

② 「たしかに西の京の家に送りつけてぞ、内に返りまゐりたりける。」の解釈として適当なものを、次の中から一つ選べ。

イ　忠兼は、得任を西の京にある得任の家まできちんと送り届けてから、自宅に帰った。
ロ　忠兼は、得任を西の京にある得任の家まで送り届けたことを、きちんと天皇に報告した。
ハ　忠兼は、得任を西の京にある得任の家まできちんと送り届けてから、宮中に引きかえした。
ニ　得任は、忠兼に西の京にある得任の家まできちんと送ってもらったことを、心の中で感謝した。
ホ　得任は、忠兼に西の京にある得任の家まで送ってもらったので、きちんと時間内に戻って来られた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③「これはいかにせしめたまふぞ」の波線部の文法的説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

イ　動詞「せしむ」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の連体形
ロ　サ変動詞「す」の連用形＋尊敬の助動詞「しむ」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の連体形
ハ　サ変動詞「す」の連用形＋使役の助動詞「しむ」の連用形＋謙譲の補助動詞「たまふ」の終止形
ニ　サ変動詞「す」の未然形＋尊敬の助動詞「しむ」の連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」の連体形
ホ　サ変動詞「す」の未然形＋使役の助動詞「しむ」の連用形＋謙譲の補助動詞「たまふ」の終止形

④「いさ、あなたの方便品は［　　］、心経はまことに言へり。～」の空欄に入る語句として適当なものを、次の中から一つ選べ。

イ　知りぬ　　ロ　知らず　　ハ　知らめ　　ニ　知らむ　　ホ　知りね

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第五講】

〔模範解答〕

一

問一　a　4　b　2

問二　A　1　B　4

問三　3

問四　5

問五　1、6

問六　元悪人であればかえって肝が据わって良い働きをすると評価した。（三十字）

二

問一　a　1　b　5

問二　A　2　B　4

問三　3

問四　3、5

問五　定業の道理も知らずに、自ら命を捨てようとした行為。（二十五字）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈現代語訳〉

一　大殿・小殿といって評判の強盗の首領がいた。大殿は、後鳥羽院の御治世に捕らえられた。小殿が、高倉の判官章久のもとへ行って言ったことは、「長い年月捕らえることができなくて、探し求められております小殿と申します強盗が思うところがあって参上しております。すぐに（私の身柄を）お受け取りください」と言う。章久は信じがたく思われながら、おおざっぱに事情を尋ねると、小殿が言うことには、「（あなたが）疑わしいとお思いになりますことは、当然でございますが、まずお考えくださいませ。ただの何の関係もない人が強盗だと自分で名乗って、（お役所に）命をまかせ申し上げて何の甲斐がありましょうか」と言うので、なるほど当然で、（章久が）詳しく尋ねると、小殿が言うことには、「長年西国の方で海賊をし、東国では山賊をし、京都では強盗をし、田舎では追いはぎをして生活してきたのだ。このような重い罪の身を受けてしまっておりますので、この世でも安らかな心はございません。夜は安らかにも寝ず、昼も心がくつろぐことはない。世の中が恐ろしく、人目がはばかられることは、悲しい苦しみでございます。それにしても一生平穏でいることができる身でもありません。最後にはきっと捕らえ出されて恥をさらし、悲しい目を見るでしょうから、人手にかかるよりは、自分から参上して、同時に長年の罪をも償うために、くびを伸ばして〔＝命をお任せして〕参上しております」と言うので、章久はしみじみ殊勝だと思われて、躊躇せず（身柄を）受け取るべきだが、そのことはなくて、答えたことは、「今は検非違使庁の庁務は停止しているのだ。すでに聞き及んでもいるだろう。長年作っておいた牢獄はすべて壊して仏堂に作り直すなどして、すべて検非違使庁の仕事をやめて、来世の安楽を祈っているのだ。徳大寺殿〔＝藤原実基〕にお仕えする源の判官康仲がただいま格別に手柄を立てようとする人だ。あそこに行ってこの事情を言うなら、きっとうれしく思うだろう」と言うので、（小殿は）「そうでございますならば、（あなたの）お手紙を頂戴しまして、源の判官殿へ参上しましょう」と言うので、（章久は）「それは簡単なことだ」と言って、手紙を書いて与えたので、（小殿は）すぐに持って康仲のもとへ行って、章久のもとで言ったように言って、「もし万が一、命を助けて、召し使ってくださるなら、特別の奉公としては、残党が数多くおりますのを、一人一人捕らえさせ申し上げよう」と言うので、康仲はおもしろいことだと思って、受け取って使った。

（康仲が）俸禄三十石を与えて毎日召し使うと、（小殿は）働きぶりがしっかりしていて大事なことが多かったので、大納言家

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（＝藤原実基）にこの様子をこっそり申し入れたところ、（実基は）「とてもおもしろいことだ。そのような者は、かえってしかるべき役に立つ方面もあるのだ。私に与えよ。召し使おう」とおっしゃったので、（康仲は実基に小殿を）差し上げた。（実基は小殿が主君のそば近くに）お仕えすることをお許しになって召し使いなさった。康仲の与えた手当の上に、五十石の俸禄をお与えになったので、小殿は喜んで、「今はこうして一生我が身が安らかで終わるだろうから、思うことはございません。お仕えする間には、決して宮中および（実基様の）お近くには無法なしわざはさせません」と言って、ひたすら夜も泊まって勤めをしてお仕えしたので、本当に頼もしくてそのあたりには夜の（犯罪等の）恐れがなかった。

二　十二歳のとき、思ったことは、「ものごとを正しく分別する方法を求めて、人として守るべき道理を聞かないならば、無駄に時間を費やして、仏教の修得に役立つことがあるはずがない。大いなる損失である。ましてまた死はすぐにやってくる。だから、万事すべきことを後まわしにしてはならない。急いでものごとを正しく分別する方法を求めて、さらに山深い物静かなところに閉じこもって修行しよう」と思って、「すぐにも高雄山を出よう」と思った。そこで薬師堂に詣でて別れを告げ、また鎮守八幡大菩薩にも別れを告げて、「夜明け前の薄暗いころに、出発しよう」と思って寝た夜の夢に（見たことは）、もう高雄を出て、三日坂まで下りたところ、道に大蛇が、頭をもたげて横たわって向かってくる。また、八幡大菩薩のお使いとして、大きな蜂で四、五寸ぐらいである蜂が、飛んで来て言うことには、「おまえは、この山を去ってはいけない。もし無理に去るならば、この先困難に遭うだろう。まだ（次の段階に進む）時機には至っていないから、（今、高雄山を出てしまったのでは）仏道修行を完成させることができない」と言うと思って、（そこで）夢が覚めた。「それではわけがあるのだろう」と思ったので、このときは思いとどまった。

　十三歳のとき、心に思ったことには、「今はもう十三歳になった。すでに年老いている。死期がきっと近づいているだろう。老少不定の習いなのに、今まで生きているのが不思議である。古人も『学問や修行は火をおこすように敏捷にせよ』と言っているのに、ゆったりとして過ごしてはならない」と、自らに鞭打って、昼夜を問わず（境地が）退行しないように修行に邁進した。ある時は後ろの山の、木の空洞に木の葉が深く積もっている上に常に行って座って（冥想し）、ある時は洞察が得られるように、「このように身体があるから、いくばくかの煩いや苦痛があるのだ。命を捨てるならば、それに優ることはない」と思って、ど

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

のような犬、狼、狐などにも食われて（死んで）しまおうと思い、墓地へ行って横たわっていると、夜が更けて犬がたくさん来て、そばにある死人などを食う音がしてからからと鳴り響くが、私を念入りに嗅いでみて、食うこともしないで、犬たちは帰った。恐ろしさはこの上もなかった。このことを考えるに、それではどんなに身を捨てようと思っても、（前世からの宿命として）定められた時期でないならば死ぬことはできないのだと知って、その後は（死のうという）思いはなくなった。「大人になってから、このことを思うと、その当時の洞察によって死んでいたならば、なさけないことであったことだろう。浅はかなことをしたものだよ」とおっしゃって、ご自分でお笑いになった。

〔重要単語〕

○きこえ【聞こえ】…**うわさ・評判**。
○ひごろ【日頃（日来）】…①**数日**。②平常。
○げに…①現実に。**なるほど**。②**ほんとうに**。
○ことわりなり【理なり】…**もっともである**。
○やすし【安し】…①**安らかだ**。**心が穏やかである**。②安っぽい。
○あはれなり…①**しみじみと心を動かされる**。②趣がある。③さびしい。④かわいそうだ。⑤かわいい。⑥情が深い。⑦すぐれている。
○さうなし【左右無し】…①**どうとも決まらない**。②**ためらわない**。
○やぶる【破る】（四段）…①**こわす**。②傷つける。③乱す。④敵を負かす。
○いたづらなり【徒らなり】…①**無駄だ**。②**むなしい**。③何もない。④ひまである。
○ひま【隙】…①**すきま**。②絶え間。③時間のゆとり。④機会。
○おとなし【大人し】…①**大人びている**。②**思慮分別に富む**。③おもだっている。
○あさまし…①**驚きあきれる**。②嘆かわしい。③話にならない。④程度がはなはだしい。
○はかなし【果敢無し】…①はかない。②**無益だ**。③たわいもない。④たいしたことではない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第五講　解答解説

〈解説〉

①　a「ありがたし」は重要単語で、「めったにない・めったにないほどすばらしい」などの意味。よって、正解はロ。b「やむごとなし」も重要単語で、「捨ててはおけない・格別だ・尊い」の意味。傍線部の直前が「智ある」なので、ここではイの「ひときわ尊い」が正解。

②「内」は重要単語で、「宮中・天皇」などの意味が大事。よって、ロかハに絞る。「返りまゐりたりける」は「引き返し参上した」ということなので、ハが正解（ちなみに、この一文だけでは「忠兼は、得任を」なのか、「得任は、忠兼に」なのかは判断不可。ここでは後半部分の重要単語を確認する意図で出題）。

③「せしむ」という動詞はないのでイは削る。助動詞「しむ」は未然形接続なので、ニかホに絞る。「たまふ」は尊敬の補助動詞（謙譲の補助動詞「たまふ」は、終止形の形ではほぼ使われない）。「ぞ」の接続は、活用語であれば連体形であることからも、やはりニが正解。

④「いさ」とセットで使用されるものは「知らず」。「いさ知らず」は「さあ、どうだかわからない」という意味。よって、ロが正解。

〈解答〉

①　a　ロ　　b　イ　　②　ハ　　③　ニ　　④　ロ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。